

『わたしのあさ』  
『ゆみ子の絵日記』

(福武書店)

—— わたしのあさ ——

関 祐二

ば、このごろのH男は笑顔で過ごすことが多く、「ハイ、ハイ、」と言ってN先生の顔をしっかりと見、手を引っぱって「追いかけられごっこ」を要求したり、ホットケーキや焼きそばを作って食べたくてI先生を調理室に連れて行ったりする姿が見られるようになっていました。それまで深くかかわりのあった私からいつのまにか他の先生のところに関係が広がっていることに気づかされます。

そんなH男を見ていると、人とあそぶことや人のぬくもりを求めているように感じられ、なんともうれしくなります。ひとりで靴をいじっていたり、高いところを渡り歩いたりしていたころを思うと、人とのやりとりや情感のこもったつき合いが見られるようになったその成長ぶりに驚くほどです。

朝、スクールバスから降りるときに、にこにこ笑っていたのは、何かやりたくて心がはずみ、うれしくてうれしくてしかたがなかったからでしょう。

一日をこんな気持ではじめられたらどんなにしあ

ある朝のこと、「スクールバスから降りるとき、H男はにこにこ笑っていて、ほんとうにいい顔をしていたよ」とS先生から言われました。そういえ

わせなことでしょう。いや、どの子もこんな気持でスタートできるような学校にしておきたい……。

ここに二冊の絵本があります。『わたしのあさ』

『ゆみ子の絵日記』です。脳性麻痺から筋肉の緊張と痛みを受ける日々の中で、家族との交流、楽しい思い出などを語るゆみ子さんの日記です。このゆみ子さんの言葉をお母さんが書きとり、絵をそえて作り上げたものがこの絵本です。『わたしのあさ』はこんな文ではじまります。

わたしは、テレビを じぶんでつけられるように なったのだから、朝のしょくじぐらい なんとかじぶんで たべられるようになりたいと おもっていました。そして、とうとう おもっていたとおり、朝はパンを、それからソーセージなどを、じぶんで たべられるように なりました。いままでは、ぜんぶたべさせて もらっていたので、じぶんで たべられるようになって、すっか

り生活が かわったのです。

わたしの朝が、あたりしくなりました。

「わたしの朝があたりしくなりました」という言葉、なんてすてきな言葉でしょう。生きている喜びが、平凡な日々の流れのなかにいっぱいあふれていて……。

自分の朝をこんなふうに受けとめられ、感じられるゆみ子さんはすばらしい。この絵本には、小さなものにも感動する素直な心を持ったゆみ子さんの明るい言葉が光っていて、お母さんの暖かく、優しい絵と共に深く心に残ります。

お母さんがゆみ子さんの文章に絵をかくようになったときのことをこう書いています。

神奈川県リハビリテーションセンターの言語教室に通っていたころ、ゆみ子は脚がひどく痛んで、車椅子にも長く坐って居られない状態でしたし、

夜を過ごすのも大変でした。ゆみ子はそんな中で日記を口述し、言葉は話したとおりを写しとるだけでいつも仕上がった文章になっていました。それに私は葉書一枚ほどの絵をかいていったのです。私はゆみ子のために絵をかくという、思いがけない楽しい時間を持つことが出来るようになって、毎日が次第に明るくなってきました。

ゆみ子さんとお母さんとの情感のこもった言葉と絵を通したつながりは、しっかりした親子の絆を感じさせます。ゆみ子さんは言葉を通してなんとか自分の内面を出そうとしていますし、お母さんは、ゆみ子さんの心をとらえ、絵を通してその心の世界を表現しようとしています。子と母が言葉と絵でひとつになり、お互いに響き合う共感の世界を生み出しています。「思いがけない楽しい時間」がふたりのあいだに漂っていて、なごやかな雰囲気にはたせられてくれます。

言葉のない子どもたちも何らかのかたちで自分の内面を伝えようとしています。しぐさで、表情で、目で、声で……。どの子もいろいろなことを感じ、それを外に表そうとしています。しかし、障害のためにその感じたことを外に出せない子どもいます。

子どもと共に生きる私たちの仕事は、子どもたちが心の内にあるものをわーっと出せるようにすることです。のびやかに表現できるように援助することです。そのために、いろいろな先入見にもとらわれず自由でいて、ゆみ子さんのお母さんのように素直でしなやかな感性を持ちつづけたいと思います。そして毎朝、子どもたちの内にあるものが今にもわーっと出てきそうなそんな朝を迎えたいものです。ひとりひとり「わたしのあざ」があたらしくなるように。

(長野養護学校)